

井戸尻考古館で開かれている香炉形土器のミニ企画展



町で発見 香炉形土器10点 井戸尻考古館でミニ企画展

富士見町池袋の井戸尻考古館で、ミニ企画展「富士見町の香炉形土器」が始まった。同町の曾利遺跡や九兵衛尾根遺跡で発見された香炉形土器など10点を展示。出現期の縄文時代中期中葉から後葉までの変遷を知ることができる。3月31日まで。

同町札沢遺跡出土で、県立歴史館（千曲市）所蔵の蛇文香炉形土器の複製を作製し、昨年、講演会を開いたのを機に特集した。一般には釣手土器と呼ばれるが、同館では中で火をたいた使用方法にちなんで、香炉形土器と呼んでいる。

展示品を時代順に見ると、

天蓋状に鉢を覆う装飾の窓がなくなり、橋のように変化していく。居平遺跡の出土品は、つかむ部分に溝があり、ひもでつり下げたと考えられるため「吊手土器」と名付けられている。

大半の土器が煮炊き用の鍋であるが、香炉形土器はランプや神事に使用されたなど諸説あり、未解明な部分も多い。学芸員の副島蔵人さんは「発掘状況や時代変遷といった考古学的観点を重視した。物から社会を読み解く考古学の方法に触れ、考える機会にしてほしい」としている。

問い合わせは考古館（電話64・2044）へ。